

和服構成における着整容姿についての考察

伊藤瑞香, 山口直子, 仲村洋子, 羽生京子

The study on personal appearance in KIMONO Making

Mizuka ITO, Naoko YAMAGUCHI, Youko NAKAMURA and Kyoko HABU

和服の仕立て上がり寸法を決める割り出し法の有効性は、著者等のこれまでの一連の^{1)~4)}研究により確認している。なかでも標準体、JIS規格によるMサイズについては検討課題も皆無ではないにしろ、ほぼ良好との感触を得ている。

これまでMサイズを対象とする時、当然のこととして腰囲と胸囲が相対的な数値の範囲、つまり腰囲・胸囲共にMサイズの範囲内にあることを前提としていた。ところが、最近の若い女性は体格が向上し、腰囲に比較して胸が豊かな傾向がみられ、腰囲はMサイズでも胸囲がLサイズのタイプが少なくない。現に、本学服飾造形学科で開講している「和服構成演習」履修者に、そうした体型の学生が見受けられる。割り出し法は身体各部を計測して寸法を算出する方法であり、その際に算出の基準とするのは腰囲寸法であって胸囲は採寸対象箇所にすぎない。そうなると前述の体型の場合、着装時のスタイルを見ると下半身は形良く収まっても胸元は不足気味になり衿の交差位置が下方になる。この現象は、胸囲の計測値が反映されないために胸幅⁵⁾が不足する事を示しており、融通性を特徴とする和服であり着装不可能でないにしても、見た目或いは着心地を考慮すると改善の余地があると思われる。

そこで今回は、被験者として前述の服飾造形学科3年次の学生に協力を得て、胸幅に直接影響を及ぼすことが想定される「衿つけ線」を4種設定して試着衣を作製し実験を試みた。

結果として、多少の起伏はあっても、衿の交差位置は衿つけ線の移動により胸幅が広くなり上がっていく傾向にある。また、和服を着装する折りに、一般的に好ましいとされる着装ポイントの条件をほぼ満たしているのは、剣先位置を裾から真直ぐと設定したケースであることを把握した。

キーワード：衿つけ線、胸幅、剣先、体型、割り出し法

I 緒言

夏祭りや花火大会でのゆかた姿は、夏の風物詩として定着した感がある。そんな折に見かける若い女性のゆかた姿で気になるのは、胸元である。下半身は裾つぼまりの好い形にまとっているのに対して、衿を合わせる交差位置が下がって少々はだけた態をなしていることである。疑問が生じるのはそうしたケースが一見したところ特に肥満とも見えず中肉中背の標準的な体格に見られることであり、Mサイズつまり標準寸法で縫製されたゆかたで十分対応可能と想像される。同じような感触を、著者らが学生あるいはオープンキャンパスなどの機会に高校生に着装させる折にも持つことが珍しくない。衿合わせのとき、若い人らしくのどのくぼみに近づけるように着付けようとしても無理、あるいは合わせられても直ぐに着崩れてしまうことが懸念される。これは、着装しているゆかたの身幅が腰回りを包み込むには十分でも、胸回りには不足していることに他ならない。このような現象が生じる要因は、近年の傾向として体格・体型の向上が見られ、腰囲との比較において胸囲が豊かになったことにより、上半身の不足つまりゆかたの胸幅寸法が不足していることにある。いいかえれば、腰囲は標準的であっても、胸囲が標準値を上回っていることに因ると推測される。事実、本学服飾造形学科3年次の学生で、各自の身体に合わせた和服の製作をテーマに据え開講している「和服構成演習」の履修者にそのタイプの学生が見受けられた。そうしたケースでは胸幅寸法をどのように設定すれば解消できるのかを究明したのが本研究である。

標準体型における標準寸法・割り出し寸法の有効性については、これまでの一連の研究においておおむね良好との結果を得ている。ただし、未だ問題視される点多々あり検討の余地を残しているのも事実で、今回の胸幅に関することもその一つである。身体の各部位を計測して寸法を算出する割り出し法は、身長・腰囲を基準とする算出方法であって、胸囲は採寸対象ではあっても割り出し項目に採用されていない。すなわち、胸幅は前幅や後幅のように算出されず、衿下がり位置での設定によって前身頃の衿つけ線が移動し結果的に生じる寸法である。裾での前幅を基点として固定し、剣先位置の決め方によって衿つけ線の角度が変化し、当然の結果として胸幅が増減する。衿つけ線の移動については、これまでの研究においてJIS規格でのS・M・Lサイズの3タイプで試みた経緯があるが、前幅がそれぞれのサイズで割り出された寸法であること、サイズにより剣先位置を決めたので、異なる意味での試みとなる。

そこで今回は同一の被験者に対して設定を4種に増やし、試着衣を作製して実験を試みることにした。つまり割り出し法で算出した裾での前幅位置を同一にし、剣先位置では衿肩明

き寸法からマイナスする数値を 1 cm から 4 cm の 4 種採用した。被験者として、「和服構成演習」履修者の中で腰囲Mサイズ・胸囲Lサイズである今回のテーマに適した学生の協力を得た。

II 着装実験

1 被験者と仕立て上がり寸法

割り出し法の妥当性を探る一連の研究において、JIS規格でいうMサイズ、いわゆる標準体であれば良好という結果を得た。採寸により求めた数値に多少の差異はあれ、着付けることで形づくるのが特徴の和服であれば、許容範囲の寸法であると理解した。そして、この研究を服飾造形学科3年次の和服構成演習の授業に反映させて実践している。その結果、腰囲はMサイズであるにもかかわらず、胸が豊かな学生が見受けられる傾向にあることが判明した。洋服用の下着（ブラジャー）を着用するのが常であれば、なおさら強調される。この様な体型を衽つけ線を移動させることにより、その着装スタイルの状態と変化の様子を観察するのが本研究の目的である。そこで演習の授業を履修している学生の中から、腰囲92.5 cm、胸囲92 cmとした学生を今回の被験者として採用した。腰囲はMサイズに属するが、胸囲はLサイズに相当する。採寸部位と寸法は表1である。なおこの寸法は、被験者が授業中に学生同士で計測した数値である。

表1 採寸部位と被験者の寸法

(単位：cm)

	採寸部位	寸法		採寸部位	寸法
イ	身長	152.4	ト	腰囲	92.5
ロ	尖椎より床まで	127.	チ	掌囲	21.
ハ	肩中央から乳まで	25.	リ	腕付根囲	37.
ニ	ウエストから肩を通してウエストまで	81.	ヌ	ウエストから床まで	94.5
ホ	尖椎よりウエストまで-2.	34.	ル	胸囲	92.
ヘ	首囲	35.5	ヲ	胴囲	64.5

この計測した数値を基に表2の割り出し法で、仕立て上がり寸法を求めた。Mサイズにおいて、後幅30cm、前幅25cm、衽幅15cmを仕立て上がり寸法とすることはこれまでの研究により妥当であると判断できたので、この寸法を基準にして新しい身幅の割り出し方を試した。これまでの割り出し法の繁雑さを解消するためでもある。なお今回、腰囲はMサイズの被験者であるため、衽幅は15cmに規定し、割り出し法により求められたそれぞれの数値も、演習

表2 割り出し法と仕立て上がり寸法

(単位：cm)

名称	割り出し法	寸法
・袖丈	身長×1/3	51.
・袖口	掌囲×1/2+12.	◎ 23.
・袖幅	衿×1/2+1.内外	34.
・袖付	腕付根囲×1/2+4.	◎ 23.
・着丈	身長×84/100	128.
・身丈(裁切り)	身長+3.	155.
・衿肩明き(上がり)	首囲×1/4	◎ 9.
・繰り越し	(ニ-ホ×2)×1/3	◎ 2.
・身八つ口	掌囲×1/2+4.	◎ 15.
・衿	身長×4/10+4.	65.
・肩幅	衿-袖幅	31.
・後幅	*腰囲100.まで(腰囲×1.5×1/2-15.)×30/55 *腰囲101.から(腰囲×1.5×1/2-16.)×30/55	30.
・前幅	*腰囲100.まで(腰囲×1.5×1/2-15.)×25/55 *腰囲101.から(腰囲×1.5×1/2-16.)×25/55	25.
・衿幅	腰囲100.まで→15. 腰囲101.から→16.	◎ 15.
・合づま幅	衿幅-1.5	◎ 13.5
・衿下がり	規定寸法(23)	◎ 23.
・衿下	ヌ-18.	77.
・衿幅	規定寸法(5.5)	◎ 5.5
・袂丸み		◎ 2.
<p>[備考]</p> <p>・新たに採用した割り出し法。(※印)</p> <p>・標準寸法を利用した数値。(◎印)</p>		

の授業で実際に行った時と同じように小数点以下を四捨五入した。衿肩明きなど、数ミリの違いが着装に与える部分もあり気にはなったが、実験目的の衿つけ線移動がより理解しやすい様にと判断で、きりの良い数値とした。当然のことながら、92.5cmの腰囲の被験者においては、後幅30cm、前幅25cmの数値を得た。しるしついで図解するが、裾位置での前身頃衿つけ線の縫代は6cmとなる。

衿つけ線の移動は、体格により剣先位置を「衿肩明き - 1cm」から「衿肩明き - 3cm」まで変化させた実験を行った経緯がある。今回は同一人物にこの3種類を適用し、さらに衿肩明き - 4cmつまり前幅真直ぐの方法を追加し、計4種類の傾きで実験を行うこととした。それぞれに採用した理由は、以下の通りである。

- 1) 衿肩明き - 1cm : Sサイズに採用したこと。くわえて藤田とら著『改訂新版 和服裁縫』⁶⁾によると標準寸法は、後幅28.5cm、前幅23cmとし、抱幅の位置で衿肩明き - 0.7cmに決め、衿下がりまで延長して剣先位置を定めている。その結果、衿つけ線の傾きは3cmとなり、今回の実験と重ね合わせると「衿肩明き - 1cm」の場所に相当する。
- 2) 衿肩明き - 2cm : Mサイズに採用したこと。くわえて現在我々が和服構成実習の授業において採用している寸法であり、衿つけ線の傾きは2cmである。
- 3) 衿肩明き - 3cm : Lサイズに採用したこと。くわえて横山千年枝著『和服寸法百科』に、胸回り88cm~92cmの人は胸幅（剣先から袖つけ線までの前身頃の幅）が23cm~24cmであると記されている。胸幅を24cmにすると、前幅が25cmであり、傾きは1cmとなる。前幅裾衿つけ線での縫代が6cmであることから傾斜分を加えると、布端より7cmの場所になり衿肩明き - 3cmが剣先位置になる。
- 4) 衿肩明き - 4cm : 卒業制作で縫製する、模様合わせが必要な訪問着などにおいて、前身頃の衿つけ線の柄置きが真直ぐに描かれている反物を目にする機会が多くなった。体格向上にも適合させるためか、抱幅と呼ばれる胸を包む身幅は確保しやすい。また、袷先をあまり引き上げない着装が一般的になっている現在の着方にすれば、合理的なのかもしれない。いずれにしる、理由は定かではないが衿つけ線の傾きは0cmであり、前幅真直ぐになる。

以上の4種の試着衣を縫製し、衿肩明き - 1cmを「試着衣Ⅰ」、衿肩明き - 2cmを「試着衣Ⅱ」とし、それぞれ「試着衣Ⅲ」「試着衣Ⅳ」とした。

2 縫製方法

視覚による判断が大きな要素となる本実験であるため試着衣の材料は、同一柄の綿100%のゆかた地を使用し、すべての試着衣において同位置に同じ模様を配置するように裁断した。

しるしのつけ方、縫い方は永野順子著『平面構成学実習 I』⁷⁾の「大裁女物ひとえ長着」の項を参考にし、省略することなく仕立てた。剣先移動による衽つけ線の変化にとまなう着装スタイルの観察であるため、前幅、すなわち裾位置での衽つけとの接点を基点とするため同一寸法とした。剣先位置を衽肩明き - 1 cmから衽肩明き - 4 cmまでの1 cmきざみで4種類の傾きのあるしるしつけを行い、試着衣として4枚のひとえ長着を縫製した。それぞれの衽つけ線を重ねたのが図1であり、衽下、抱幅および袖付より衽先までの胸幅は表3にしるした。

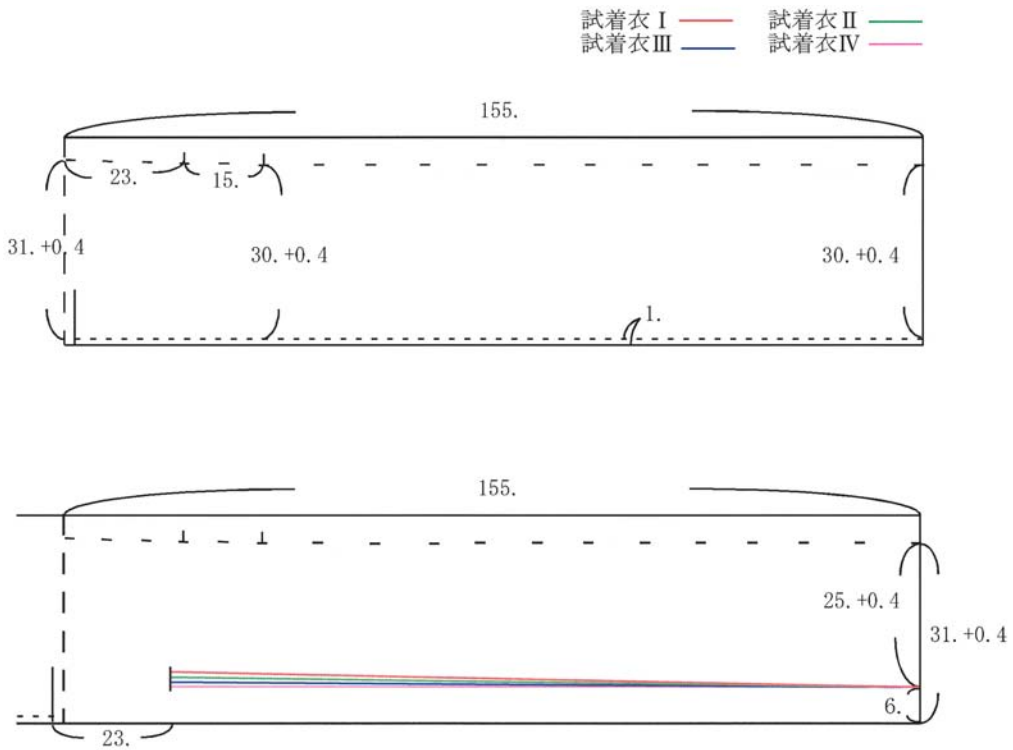


図1 試着衣しるしつけ図

表3 各位置における前幅寸法

(単位：cm)

	胸幅	抱幅	衿下	裾
試着衣Ⅰ	22.6	22.4	23.2	25.
試着衣Ⅱ	23.6	23.2	23.8	25.
試着衣Ⅲ	24.6	24.1	24.4	25.
試着衣Ⅳ	25.6	25.	25.	25.

3 着装方法

剣先移動によつての着装スタイルを観察するのが目的であるので、着装条件を均一にする必要がある。そこで、以下の6項目に注意し、同一人物によつて着装させた。

- 1) 上半身の背縫は背中心に合わせる。
- 2) 背、両脇の裾位置をくるぶしの隠れる程度として、床より4cm上に決め、上前を決める時、左前身頃の衿下を右腰骨にあてる。
- 3) 腰紐の位置は腰骨より2cm上に締める。
- 4) 肩山を肩線より2cm後方に決める。
- 5) 上半身と下半身の衿つけ線を揃えるようにして、頸窩点直下に前面衿の交差位置を決める。
- 6) 身頃のゆとりは両脇に寄せる。

なお、2)において裾位置に注意したのは、腰紐より上の状態をより一定にし、剣先移動による上半身のゆとり量を含めたスタイルの観察に重点を置いたためである。

以上のような点に留意して着付けるよう心がけたが、体型の左右不均等などにより、無理と判断した場合は、自然な状態で着装させた。

4 実験方法

これまで記述した方法によつて縫製し、着装させた試着衣のそれぞれについて、着装直後と動作後の写真撮影を行い着装状態の変化を観察した。

- 1) 着装直後、前面、背面、両側面より写真撮影を行った。
- 2) 2階分の階段昇降を含む5分程度の歩行後、身体の動きが集約されていると考えられるラジオ体操を行い、1)と同様に写真撮影を行った。

試着衣 I



試着衣 II



試着衣 III



試着衣 IV



図2 着装直後

試着衣Ⅰ



試着衣Ⅱ



試着衣Ⅲ



試着衣Ⅳ



図3 動作後

着装直後および動作後の写真は図2と図3である。ただ、紙幅の関係により左側面写真は省略した。右側面のほうがさまざまな問題点を持ち、比較検討により適していると判断したためである。

Ⅲ 実験結果および考察

上記の方法で縫製し着装させた4種の試着衣であるが、着装直後と動作後の変化をより詳しく把握するため、次のような部位の計測を行った。計測値は表4である。

- 1) 下前の折り返し位置：床から
- 2) 上前の襷先位置：床から
- 3) 腰紐位置：衿先から腰紐位置まで
- 4) お端折り量：衿つけ線位置で帯下からお端折り山まで
- 5) 背中心：お端折り山で上半身の背中心を基準とする
- 6) 衿つけ線：下半身を基準とする上下のずれ

表4 着装直後と動作後の計測値

(単位：cm)

	試着衣Ⅰ (衿肩明き－1.)		試着衣Ⅱ (衿肩明き－2.)		試着衣Ⅲ (衿肩明き－3.)		試着衣Ⅳ (衿肩明き－4.)		
	着装直後	動作後	着装直後	動作後	着装直後	動作後	着装直後	動作後	
1) 下前の折り返し位置	10.	8.8	10.	11.2	10.	10.2	10.	11.6	
2) 上前の襷先位置	8.	7.4	8.	7.7	8.	7.5	8.8	7.6	
3) 腰紐位置	8.	7.8	8.	8.2	8.	8.6	8.	7.2	
4) お端折り量	前	7.	6.	7.	6.7	7.	7.	7.	7.
	後	7.	5.2	7.	6.	7.	5.8	7.	6.
5) 背中心	0	右に0.6	右に0.8	右に1.4	右に0.8	右に0.6	右に1.	右に1.2	
6) 衿つけ線	右に1.8	右に1.8	右に1.	右に0.8	右に0.5	右に0.8	0	0	
7) 衿合わせ角度	47度	49度	48度	47度	51度	51度	55度	52度	
8) 頸窩点	7.3	7.4	6.	6.7	3.	4.4	3.6	4.8	

着直後

- 試着衣Ⅰ： 衿つけ線の上下のずれが多く、頸窩点が下がり鋭角である。身幅に関しては、被験者の腰囲に合った寸法（後幅30cm・前幅25cm）のため背中心の上下のずれがなく合っている。いかえればゆとりがないともいえる状態である。
- 試着衣Ⅱ： 頸窩点は試着衣Ⅰとほぼ同様だが、衿つけ線の計測値が少なくなっているのので、胸のゆとりがやや増えたと思われる。身幅に関しては、上前の腰位置を固定しているのに下半身の背中心が右よりになった。胸のゆとりからの影響で、身幅にも僅かなゆとりが生まれたと考えられる。
- 試着衣Ⅲ： 頸窩点を試着衣Ⅰ、Ⅱと比較すると、交差位置が上がり鈍角になっているのが、数値上視覚上でも見てとれる。衿つけ線の数値が試着衣Ⅱよりもさらに少なくなり、ゆとりが増しているように感じるが、身幅の変動は見られない。
- 試着衣Ⅳ： 頸窩点は試着衣Ⅲとほぼ同様であるが、上下の衿つけ線が揃い、被験者の胸囲に対しては一番無理なく自然に胸を包んでいるといえる。胸のゆとりが十分であることに比例して、下半身の背中心も他の3種より最も右よりに位置している。

動作後

- 試着衣Ⅰ： 下前の折り返し位置については、他の3種は引き上げられているにも関わらず、試着衣Ⅰの場合だけ下に引っ張られている。衿つけ線の移動は見られないが、お端折り量も減り、背中心位置も0.6cmの移動が見える。比較的ゆとりがなくしかも上前のずれがないということは、必要とするゆとり量を下前がカバーするものと考えられる。それゆえ写真でも下前にしわが見られる。
- 試着衣Ⅱ： 背中心の右へのずれが微量なので後身頃での動きはほぼなかったといえる。お端折り量は試着衣Ⅰに比べると減り量が少なくなっているのに下前の折り返し位置が上に引っ張られている。これは、下半身は身体に添いつつあるが上半身にはまだ不足があると考えられる。
- 試着衣Ⅲ： 下前の折り返し位置と前面のお端折りがほぼ動いていないということは、被験者にとって着心地の良いものと想像するが、被験者も同意見であった。ただ衿合わせを見ると、鈍角の時のほうが鋭角よりも頸窩点が下がる傾向にある。着崩れという観点から見ると、試着衣Ⅲがベストではないかと思われる。
- 試着衣Ⅳ： 下前の折り返し位置の変動は試着衣Ⅲよりも大きいのが、前面のお端折り量の

変化がなく、衿つけ線のずれは動作後にも認められなかった。衿元に関しては試着衣Ⅲと同様である。着装直後の容姿は試着衣Ⅳが好ましいと述べたが動作後も同じことが言えよう。

考察

以上、4種の試着衣について、着装直後と動作後を計測値と写真によって観察した。表4にあるように動作後の計測値に僅かな変動はあるが、着崩れという程ではなく手直して充分補うことが出来る範囲である。今回は着装スタイルに注目するため、4種の衿つけ線の変化がどのように影響したのか視覚を中心に考察する。試着衣Ⅰは動作後の前後のお端折り量と下前の折り返し位置の変化が大きいにも関わらず、衿つけ線の変動はなかった。これは抱幅や身幅のゆとり量が少ないため、上半身や下半身に多く移動したと見える。移動をした分、写真を見ると上半身の下前に横じわが見られる。身幅不足により、衿つけ線も移動するように思われるが、人間の動作の中で、腕などは横に動かすより物をとったり吊革をつかむ等上げ下ろしによるもの、また下半身は歩行や階段の昇降など縦移動が考えられるため、お端折り量を基点に上下に引っ張られたものと推察する。

試着衣Ⅱは、衿つけ線が衿肩明き-2cmのため抱幅や身幅に多少のゆとりが生まれ、お端折り量の変動は少なくなり、下前の折り返し位置も試着衣Ⅰとは違い、上へ引っ張られている。この現象は他の試着衣Ⅲ、Ⅳにも見られることで、下半身の落ち着きを意味しているのではないかと判断できる。

被験者自身、一番着心地の好いのは試着衣Ⅲとしている。衿つけ線のずれはあるが、着装直後と動作後の数値の変動も少なく、衿の交差位置が試着衣Ⅰ、Ⅱより上がっていることで好感触を得たようだ。

しかし着装スタイルという点では、数値に表されているように試着衣Ⅳの背中心位置と衿つけ線の上下が揃い、衿の交差位置は試着衣Ⅲとほぼ同様であるが鈍角になり自然に体を包んでいると考えられる。

さらに写真観察によると、上前の袂先位置を同じにしているにも関わらず、試着衣Ⅰと試着衣Ⅳでは、試着衣Ⅰのほうが衿つけ線が斜めのため袂先が上がって見える。着物は裾つばまりに着ると言われているが、昨今の着付け方をみると試着衣Ⅳの前からみた容姿のほうが現代的と思われる。また衿つけ線の移動の影響から身幅にゆとりができ、脇線の位置も試着衣Ⅰから試着衣Ⅳでは徐々に後方へいき、側面の姿も好くなっている。

今回は腰囲がMサイズ、胸囲がLサイズという、昨今の若い女性に多々見られる体型で実

験を試みた。したがってすべての体型に添うものではないが、この被験者に対しては試着衣Ⅳが好ましい容姿であると認められた。

総括

腰囲と胸囲は一応比例するものと想定し、着装実験を重ねてきた。しかし、身体を肥瘦や長短でサイズを分類しても、洋服などを購入する際、上衣と下衣をサイズ違いで選択することがある。この様な体型の人に対しても、ワンピース仕様の長着であれば、上半身も下半身も同時に適合しなくてはならない。一方、和服では衿下がりで剣先位置を決め、裾での前幅と剣先を結び衿つけ線とし、胸幅が決まる。今回の被験者は、腰囲はMサイズであるが胸囲はLサイズに属する。まとうことによって着装する和服は、前面布の重なりを深浅によってある程度の範囲で着装可能である。しかし、より身体に合って着心地のよい和服寸法を求めため、剣先位置の移動という縫製の面から試着衣を製作し、着装スタイルの相異を観察したのが本研究である。

前述した着装条件に添って着装させた姿は、前面衿の交差位置に多少の違いはあるにせよ、着物姿としての違和感はない。被験者は茶道をたしなみ、和服を着慣れていることもあって、自然に和服に適した身動きをしている可能性もある。動作後の変化も、手直しで済む程度のものであった。着付けることの難しさと同時に、平面的な構成で仕立てられた和服の柔軟さと奥深さをあらためて感じた。衿の交差位置が上方に移動する、衿つけ線を上下で揃えるなど、一般的に言われている条件をほぼ満たしているのは、胸幅を広く確保出来た試着衣であった。衿肩明きと前幅との関係により剣先位置の移動には限界があるが、今後、胸囲がもっと大きい体型や、反対にSサイズの人やいかり肩、なで肩など前面に影響を及ぼすであろう体型の着装実験を続けていきたい。

[付記]

本研究を作製するにあたって、和服構成研究室の内田彩子氏に協力を得たことを感謝する。

文 献

- 1) 仲村洋子・羽生京子：和服における着崩れについての考察 和洋女子大学紀要 43 家政系編 37～51 (2003)
- 2) 羽生京子・仲村洋子：和服における着崩れについての考察（第2報）和洋女子大学紀要

- 44 家政系編 11～26 (2004)
- 3) 仲村洋子・羽生京子：和服における着崩れについての考察(第3報) 和洋女子大学紀要
46 家政系編 13～27 (2006)
- 4) 仲村洋子・羽生京子：和服における着崩れについての考察(第4報) 和洋女子大学紀要
48 家政系編 9～20 (2008)
- 5) 横山千年枝：和服寸法百科 41 (1995) ふたば書房
- 6) 藤田とら：改訂新版 和服裁縫 36～43 (1970) 光文社
- 7) 永野順子：平面構成学実習 I 46～85 (1983) 衣生活研究会

伊 藤 瑞 香 (生活科学系 衣生活学研究室 非常勤講師)
山 口 直 子 (生活科学系 衣生活学研究室 実験助手)
仲 村 洋 子 (生活科学系 衣生活学研究室 准 教 授)
羽 生 京 子 (生活科学系 衣生活学研究室 教 授)